第１回キールボート強化委員会議事録

2011 年 5 月 27 日（金）
ちよだプラットフォームスクウェア 401 会議室

◆委員長：中澤信夫　司会：久保田悟　事務：金子純代　村井梨恵
　書記：中山遼平　大河原昴広
◆出席者（順不同）：山崎達光　武村洋一　寺澤寿一　植松眞　平井淳一　亀山浩史　豊崎謙
外山昌一　霜山純夫　久米敏　石黒建太郎　中里英一　古川龍文
稲葉健太　日根野聰弥　上松慮生　武居徳真　原巨樹　畠山知己
熊谷一樹　永松馨介　児玉萬平　稲葉高広　山田寛　保田卓哉

◆開会 19:05
◆委員長挨拶　　中澤信夫　キールボート強化委員長
◆JSAF 役員挨拶　　植松眞　ＪＳＡＦ副委員長
◆出席者自己紹介

◆自由討論
霜山：大学生のセーラーの数は多いが、インカレ終了後続ける人間が少ない。以前息子と同級生をインカレ終了後、葉山のヤマハ 30ft に乗せたら非常に喜んでもらえた。学生セーラーがキールボートに参入するきっかけを積極的に提供すべきではないか。その為には、学生向けのキールボート教室や、金銭的負担を軽減する為、無料のキールボートを提供してはどうだろうか。

古川：大学ヨット部や J24 などでの、メンバー確保の方法は？

畠山：早稲田大学ヨット部では、スポーツ推薦、経験者、未経験者の 3 つの経路で入部してくる。未経験者には、ヨットは楽しいものと意識を植え付ける為、クルーザーでの試乗会などもしている。最近は女性部員の確保が部員を増やすための重要な要因になっている。

上松：自分もそうなのだが、現在は募集していないが、J24 関東フリートの
クルーバンク制度を利用して、活動の場を与えてもらった。

稲葉(健)：もう少し議題を絞り込んだほうがいいのではないか。短期的に解決できる問題ではない。いいサイクルを作る為に PDCA の作成も必要ではないか。

久保田：今後の活動サイクルの構築をする為に、初回は参加者の経験や思いを出し合い、その中で議題を詰めていこうと考えている。

霜山：キールボート参入のきっかけとしてユースマッチの開催数を増やしたり、規模を大きくしてはどうだろうか。

日根野：そもそも、キールボート強化委員会という名前にあるように、委員会の最終目標とされる「強化された状態」とはどういうものかというのをもっと明確にし、委員会で共有するのが先ではないか。競技人口なのか、成績なのか、外国人の参入なのか、目標をはっきりさせたほうがよいのではないか。

中澤：セーリング人口をまずは広げることが発展に繋がると考えている。テーマ別の小委員会の可能性もある。最初は皆で意見を交換し合いながら、楽しい委員会にしたいと思っている。

武村：過去にテイジンカップという学生主体のマッチレースがあったが、それに参加していた学生たちが現在もキールボートへ乗り続けている。限られた費用の中での戦力の増強、シーマンシップの学習、競技人口の増加の戦略を当委員会中心に作っていってほしい。

畠山：環境整備が必要ではないだろうか。ワンデザインの数を増やし、キールボートレースの醍醐味を知ってもらうのはどうか。艇体を持っていなくても、バック一つでレースに出れるような、例えばセールメルボルンのような大きなレガッタがあってもいいのではないか。大学生はディンギーしか知らなくて、インカレ至上主義でもある。もっと視野を広げる為、オフシーズンにキールボートに勧誘するのもいいかもしれない。

中里：それだけでは、ブイ回りのレースにしか目が向かないのでは。外洋ヨットにも目を向けさせたい。現在はレディース委員会で体験セーリングを行っている。卒業生も参加してほしい。

外山：オーナーの立場として話させてもらうと、チームはしっかり組織として成り立っている。学生がチームに入ってきたら、新人扱いになるだろう。若者の人口を増やしていかないと高齢化が進んでしまうが、オーナー艇では上下関係が厳しい。更にヨットハーバーのスタッフも高齢化している。地域やヨットハーバーサイドの人間の意見も聞きたい。

原：このままキールボート界が将来どうなるのかの問題点の切り口を見つけなければ、委員会の目標を明確にできないのでは。

中澤：パッと乗れる艇がある環境をまず作り、小型のキールボートの数を増やし、段階的に外洋ヨットに進める環境を整えたい。その為には、例えば小型のキールボートを各ハーバーに置いてもらったり、海外流出しているヨットの買い上げして、パイを増やしたい。

植松：実は JSAF でワンデザインヨットを全国のヨットハーバーに複数艇導入することが検討されている。毎週、幅広い層に向けてレースを開催し、その後公益法人化などを考えているが、それらはすべて JSAF が関与しなければならない。最終的にはセールニューポートのようなヨットスクールを設置し、クルーをスカウトできる環境を作れれば。

山崎：皆さんの話を聞いて、改めて人材集めが切迫している現状を目の当たりにした。クルーの集め方は昔も今も同じで、需要はあるが平行線である。壮大な夢を掲げたニッポンチャレンジでは未経験者だけで 600 人の応募あったが、へたをすると人生を左右させてしまう問題も内包しており、注意が必要だった。量と質の問題があるので、小委員会に分けてもいいのでは。

武居：普段指導している学生を相手にアンケートを取ってきた。キールボートに興味は大変あるが、きっかけがない、敷居が高いなどといった遠い存在のような回答が出た。更にオーナーシップ下では気が重いという意見も出た。仲間同士でも気軽に安価にヨットができる環境も求めている。

日根野：量の問題についてはやはり艇数が少ない。参加しようという意志も弱い。もっと入り口を広げなければ。質の向上については、トップレベルもだが、底上げも必要では。

稲葉(健)：様々なヨットレースの日程が重なりすぎていて、レースが人を奪う状態になっている。JSAF レベルで調整できないか。人の分散は、なかなか大きな力にならなくて楽しくないし、更にヨット人口の減少で悪循環となっている。

永松：関西はかなり壊滅的。出れるレースがないのでレーティングでのレースに出場しているが、各ヨットの性能差が離れすぎていて、レースをしている感覚がなく、面白くない。これが艇の減少とリンクしていて悪循環になっている。海外レースにあるような、関東と関西でのネットワークを構築し、チャーター艇のコントロールができれば、もっと気軽に全国のレースに出場できるのでは。そういうネットワークの構築を希望する。

山田：ディンギーからキールボートへ移行するには壁がある。それはキールボートには目標がない。ディンギーではインカレやオリンピックがあるが、キールボートレースの頂点であるべきジャパンカップが現在も混沌としていて、目標になっていない。新しい目標があれば。

平井：大学生の勧誘の話が出たが、大学生自体のヨット人口も減っていて、廃部の危機に晒されている。更に下の高校生、中学生、小学生も減少傾向が著しい。子供たちの育成も視野に入れなければ、何十年後のキールボート界の未来はないのでは。もっと子供のための安価なヨットスクールなどを開設し、年齢問わず広くヨットの普及を。

中澤：日中韓親善レースなどの海外レースに学生セーラーを、社会人チームに混ぜて連れて行き、どのようなものかを体験させる方法もある。

畠山：目標のあるものは芯がぶれることはない。JSAF がキールボートの目標設定やスケジュール調整をして、各クラスの選手権の合同開催や、オリンピックウィークにキールボートクラスも併設したり等、セールメルボルンのような大きなレガッタがあれば目標設定しやすいのでは。その中でセーリングクリニックも同時開催すれば、育成も含め、興味を持ってくれるのでは。

霜山：ジャパンカップは頂点であるべきものと考えている。価値向上の手立ては是非とも JSAF にお願いしたい。

古川：トップクラスで楽しむことも大事だが、仲間同士でわいわい愉しめることも大事ではないか。

永松：家族や友人と一緒に楽しめるレースロケーションも大事で、例えば和歌山や沖縄等の綺麗な場所での開催も日程を調整して、たくさんのレースを開催してほしい。

児玉：当委員会に参加し貴重な意見が聞けて、非常に忌々しき事態であることがわかった。ジャパンカップの件も含め，当委員会を通して JSAF に提案していく。

◆閉会 21:00

◆次回委員会は 6 月 23 日（木）ちよだプラットフォームスクウェア 401 会議室